

編集責任者 山村 準

tel:0595-63-1725 Email jyun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】 錦生地区：100部 赤目地区：150部 箕曲地区：70部 ひなち地区：205部 つつじが丘：430部

【全戸配布】 国津地区：380部 滝之原地区：125部 市民センター：90部 (9地区) 名張市議会：20部 名張市役所：30部

猪・鹿 生息域北に拡大

地球温暖化により、人類がこれまで経験したことがないような地球規模の危機に直面しており、気候変動対策が世界の喫緊の課題であるとの認識が広がっています。

地球温暖化は、気温を上昇させるだけでなく地球全体の気候を大きく変える「気候変動」を引き起こします。

豪雪地帯である東北地方での降雪量が減少していることもその一つです。今後の温室効果ガスの排出量によって変わってきますが、東北地方の100年後の年平均気温は、現在より2〜3度上昇すると予想されていて、東北地方の降雪量は更に減少するものと考えられています。

生息限界70日

イノシシの生息限界ラインは、積雪深さ30センチ以上の期間が70日以上続く地域では越冬できないとされていて、生息域の北限は宮城県、青森、秋田、岩手、山



写真「マタギ衆」東北地方は古くから狩猟が盛んで、多くのまたぎ達が活動していました。

形は空白地域でした。しかし、近年では、温暖化の影響で積雪量が減少し、東北地方で生息域を広げ、絶滅と判断されていた北東北でもイノシシによる農作物被害が確認されています。イノシシは、南

方系の動物で、足が短いため多雪地帯では身動きができないほか、雪が多いと地面を掘り返して餌を取るのが難しいため、積雪量の少ない西日本に分布が偏り、積雪の多い東北地方や北陸地方に進出することができないでいたのですが、近年では、温暖化の影響で積雪量は年々減少してきて東北地方でも徐々に増えてきています。ニホンジカ(以下シカと表記)は、かつて東北では、空白地帯とされてい

ましたが、森林総合研究所によると、江戸時代初期、東北各地の大名が領民らに指示し、数千頭単位で狩っていたという記録が残っていることから、多数のシカが生息していた可能性があるとされます。シカはもともと繁殖力が高いことに加え、捕獲規制や温暖化などで、西日本では急速に増加に転じ、農林被害が増加。東北地方も、もともとシカ・イノシシなどが棲めない環境ではないので、温暖化を

始め、過疎による耕作放棄地の拡大や狩猟者の減少などが個体数増加に拍車をかけています。「シカは日本固有の動物ではなく、東南アジアから中国の東部沿岸にかけて広く分布。分布域が広いため種内の多様性が高くいくつもの亜種に分類されています。そのうち日本に生息する主な亜種は、エゾシカ(北海道) ホンシユウジカ(本州) キュウシュウジカ(四国・九州)。したがって、東北地方に生息するのはホンシユウジカです。」

イノシシ・シカ北上

東北地方の太平洋側では、明治から大正期にかけてイノシシは殆ど消滅。(これは豚コレラの疑いがもたれています)。全国的に見ても、明治期に新政府が肉食を奨励したこと

もあって、イノシシやシカは一時期全国的に激減しました。青森県では、100年以上前に絶滅したとされていたイノシシが、確認されています。今後、温暖化の進行に伴いシカの生息域は、特に北海道・東北地方・北陸地方において急速に拡大することが予想

されます。環境省は、増加を止めるには狩猟が重要だと呼びかけていますが、風評により放射能汚染で肉を食べるのが難しくなっていることなど、東北地方では放射能問題が狩猟の障害になっています。2014年(平成26年度)の調査結果によれば、シカが分布していないのは茨城県のみで、日本はシカ王国と

なっています。1978年(昭和53年)以降40年間でシカの生息域は7倍に拡大。イノシシの生息域は約1.9倍に拡大しています。西日本や北海道では、増加したシカが口の届く範囲の植物を食べ尽くし、自然植生の食害(生態系被害)を引き起こし国土保全問題にも関わる大きな問題となっ

ています。かつてからこのように、社会問題大になるほど被害を受けていた地域でも現状は変わらず、高い生息密度の状態で広範囲に広がることとが推測され、野生動物との軋轢は一層高まる

ことが予想されます。シカやイノシシの北上とは、決して九州や

奈良のシカが北陸地方に移動するというものではありませんが、温暖化の影響で雪が少なくなるなど、シカやイノシシが棲みやすい環境が九州から青森まで広がったということだ

と思っして下さい。東北地方は稲作が盛んな穀倉地帯です。温暖化の影響で北海道や東北地方では、米の生産量が増加。関東より西の地方では減ると

予測されています。東北地方のかつての分布空白域にイノシシやシカが侵入し、個体数増加に伴って農林業被害や生態系被害が生じ、人身事故や人獣共通感染症などの発生も懸念されています。

江戸時代には八戸市近郊において、シカやイノシシによる農作物被害により飢饉が発生した記録があります。

秋田には「猪」の付く地名が残るなど、昔は東北にもイノシシが多数生息していた可能性

があります。江戸時代以前、東北ではイノシシによる被害が深刻になり、排除したのではないかと

いわれています。農業が盛んな穀倉地帯である東北地方にイノシシやシカなどが戻ってくれば、大変な被害が出

る恐れがある。「共存が徹底的な排除か、地域の将来像をもとに、今何をすべきか早急に考えるべきだ」と地元は警鐘を鳴らしています。

大気中の温室効果ガスの濃度は増加したことが温暖化の原因ですが、それには化石燃料への依存や森林の減少など人間活動が大きく影響しています。

地球温暖化への対策を求められているのは、私達です。一人一人が行なう省エネのための小さな工夫でも、地球温暖化の防止に役立ち

ます。この気候変動に脅かされているシカ・イノシシなどを人間が責任をもって本来の自然生態系にふさわしいレベルで適正に管理することが、私たち人間に課せられた使命です。

本州各地域ではシカが急増している

系、生態系、攪乱や森林の破壊、農林業への被害などさまざまな影響が深刻化しています。

草食獣であるシカは、エサ供給量によって栄養状態や繁殖状態、死亡率などが変化すると

自然生態系がシカの数をコントロール

本州各地域ではシカが急増している。生態系、攪乱や森林の破壊、農林業への被害などさまざまな影響が深刻化しています。草食獣であるシカは、エサ供給量によって栄養状態や繁殖状態、死亡率などが変化すると

いわれています。条件が揃えば増加を続けるこ

とができる生き物ですが、北海道や東北地方では、高密度時に積雪などにより餌不足になり自然消滅することが知られています。屋久島西部の世界自然遺産地域内に生息するニホンジカの固有亜種・ヤクシカの個体群が、2014年以降、減少傾向にあることを明らかにしました。全国的にシカの急増が伝えられている中で、人間による捕獲や駆除がないにも関わらず、シカが継続的に減少することがわかったのは初めてです。

屋久島には、大型肉食動物が分布していません。ヤクシカは天敵が不在のまま進化してきました。また、西部の世界自然遺産地域は、過去およそ50年間シカの捕獲が行われていないため自然なシカの生息を知ることはできません。この地域のシカの数は調査を開始した2001年から2014年まで年率9%で増加していました。ところが、それ以降は、年率マイナス15%で減少し始めました。この地域のシカが地域外へ移出する割合は多めに見積もっても年5%であったことから、シカの数が増加から減少に転じた原因は、移出ではなく自然要因による死亡率の増加だと考えられます。これらの結果は自然生態系がシカ個体群を調節している可能性を示すものです。ただし、シカ個体群の変動を理解するには数十年単位の継続データが必要であり、現在の減少傾向もいつまで続くかはわかりません。

(北海道大学hpより引用) 後略



自然減少を続けるヤクシカ 北大HPより



一服

『ワクチンとオリパラ対応への怒り』

名張市民で良かった！。生れ故郷の大阪だったらワクチン予約も大変。

政府の『かかりつけ医』の定義の曖昧さで大阪市内の身内から嘆きが聞こえる。大阪では、中等病床の病院で、かつ毎月通院実績があるにも関わらず「かかりつけ医の範疇外」で接種出来ないと聞き冒頭の実感。

オリパラ開催をIOC、JOC、組織委、政府がコロナ禍においても、当初から「開催ありき」と目論んでいたのなら、ともかくワクチン確保が遅過ぎる。

政府やオリパラ関係機関の後手、後手の対応を隠すがごとく、開催可否から、いつの間にか「開催」ありきで、次は「無観客か観客ありか」と実にうまく論点をすり替えてきた。

これらの一連の報道内容から、IOC、JOC、組織委、

政府などのなし崩し的な「オリパラファースト・世論無視」の対応に怒りともにあきれ果てた。

彼らは当初からこのコロナ禍でも「有観客開催」を決めており、政府分科会の提言を「個人の意見」や「地平の向こうの話」などと蔑ろにした。橋本会長に至っては、「尾身会長も開催中止とは言わなかった」とのコメントに、思わずテレビに向かって「開催の前提をよく聞け！」と怒り心頭の日々が続く。

分科会はコロナ緊急事態宣言下のオリパラ開催は「普通は無い」という前提。が、政府などの開催方針を「最善は無観客」だが「観客数限定が条件」と譲歩したのが分科会。こんな発言真意を歪曲した「アスリート・橋本聖子」氏のイメージが地に落ちた思いだった。「ちょっと一服」が「怒りの一服」を盛りました。

【寄稿：畠山ひさ子】

家庭菜園風景



近年、サル、イノシシ、シカなど大型獣類の被害に加えて、タヌキ、アライグマ、ハクビシンなど、中型獣類による被害が増加しています。特に市街地においては、中型獣類による生活環境被害が心配されています。

背景には耕作放棄地の増加や住宅地での「空き家」の増加や市民農園など家庭菜園が増加したことなど複数の要因が関係していると考えられています。近年、市街地においても人口減少の影響を受け空き家や廃屋が増加している、アライグマやハクビシンなどの格好の棲家となっていて、繁殖は農村部より住宅地の方が多いいわれています。

被害金額も大型獣被害額の陰に隠れていますが、年間約9億円と増加傾向にあります。神社・仏閣などの文化財を破損するなど金額に換算できない被害もありません。また、大型獣類の被害金額も、ピーク時の239億円から158億円と数字の上では減少していますが、イノシシやシカが減っているわけではなく、農耕あきらめて耕作放棄地が増加した分が、被害減として数字に現れているだけで、決して被害やイノシシ・シカなどの頭数が減少したわけではありません。近年、市街地には市民農園や家庭菜園が増えていますが、無防備なところが多く、野生動物の生息域近くに住民と離れて住む住民の間では、対策への関心や理解が異なり、市街地に共通する意識の希薄さが見て取れます。市街地の菜園では、

近年、サル、イノシシ、シカなど大型獣類の被害に加えて、タヌキ、アライグマ、ハクビシンなど、中型獣類による被害が増加しています。特に市街地においては、中型獣類による生活環境被害が心配されています。

背景には耕作放棄地の増加や住宅地での「空き家」の増加や市民農園など家庭菜園が増加したことなど複数の要因が関係していると考えられています。近年、市街地においても人口減少の影響を受け空き家や廃屋が増加している、アライグマやハクビシンなどの格好の棲家となっていて、繁殖は農村部より住宅地の方が多いいわれています。

被害金額も大型獣被害額の陰に隠れていますが、年間約9億円と増加傾向にあります。神社・仏閣などの文化財を破損するなど金額に換算できない被害もありません。また、大型獣類の被害金額も、ピーク時の239億円から158億円と数字の上では減少していますが、イノシシやシカが減っているわけではなく、農耕あきらめて耕作放棄地が増加した分が、被害減として数字に現れているだけで、決して被害やイノシシ・シカなどの頭数が減少したわけではありません。近年、市街地には市民農園や家庭菜園が増えていますが、無防備なところが多く、野生動物の生息域近くに住民と離れて住む住民の間では、対策への関心や理解が異なり、市街地に共通する意識の希薄さが見て取れます。市街地の菜園では、

困っているつもりでも効果のある困りになっていない事例が多く見受けられます。被害を減らしていくためには、農家だけでなく市街地住民と協力して取り組んでいくことが大切です。地方都市農村部と街部は、農村が風邪を引けば街では熱を出すというほどの共生関係にあり、都市部の菜園管

獣害は地域全体の問題！ 気をつけよう人獣共通感染症

増加傾向にあります。神社・仏閣などの文化財を破損するなど金額に換算できない被害もありません。また、大型獣類の被害金額も、ピーク時の239億円から158億円と数字の上では減少していますが、イノシシやシカが減っているわけではなく、農耕あきらめて耕作放棄地が増加した分が、被害減として数字に現れているだけで、決して被害やイノシシ・シカなどの頭数が減少したわけではありません。近年、市街地には市民農園や家庭菜園が増えていますが、無防備なところが多く、野生動物の生息域近くに住民と離れて住む住民の間では、対策への関心や理解が異なり、市街地に共通する意識の希薄さが見て取れます。市街地の菜園では、

困っているつもりでも効果のある困りになっていない事例が多く見受けられます。被害を減らしていくためには、農家だけでなく市街地住民と協力して取り組んでいくことが大切です。地方都市農村部と街部は、農村が風邪を引けば街では熱を出すというほどの共生関係にあり、都市部の菜園管

街の菜園ではこんな被害が！

理が農村での獣害対策にも影響するのです。動物はその生存本能に従い、「安全」で、「餌の豊富」な場所を探しています。その二つの条件を満たす場所が都市部であつたとしても、そこが利用価値の高い場所となり多数の野生動物を呼び寄せ、それが結果的に、街部や農村部の獣害の原因につながるのです。獣害対策は、個々の農家による点的な取り組みでは、被害地域を移動させるだけで、地域全体の被害軽減には繋がりません。

このため、地域全体として害獣が生息、侵入しにくい環境の整備や、捕獲などの対策を実施していくことが重要です。その結果、地域全体の被害軽減と個々の負担の低減を図ることが可能となります。ハクビシンなどの中型獣類は市街地にも多く生息している、市街地住民にも、これらの野生獣に対する正しい知識や対策の必要性について、理解を深めることが重要なこととなります。

ここ最近、獣害対策の現場では、「地域ぐるみ」で取り組むことの重要性が強調される機会が多くなり、地方都市全体で街の人や、農家・非農家が一体と

なる、地域ぐるみの対策の重要性が重視されるようになりました。今後は、対策を地域全体で進めるためには、街の人たちにも、野生鳥獣に対する正しい知識や対策の必要性について理解を深めることが重要になります。国勢調査（平成27年度）によると高齢化率が都市部が24%であるのに対して、農村部では31%。高齢化、過疎化の進行している集落においては、獣害対策の推進も困難な地域もみられ、それが獣害を増加させ、ますます過疎化に拍車をかける負の連鎖となっています。今後、対策をしなければ、更に被害は増加し、その結果として耕作放棄地は増え、野生動物の分布域はさらに都市部へ接近して行くことが予想されます。今や獣害は、全国的な問題で、市街地住民と農村部が意識の共有や合意形成を図り、地方都市全体の問題と捉え、対策に当たることを求められています。

中型獣類の被害は、農作物への被害だけでなく、生態系や生活環境にも及び、人獣共通感染症へのリスクは高まっています。今世界ではコロナ禍が広がっていますが、今後、新たな野生動物由来の病原体による感染症が発生するよう

思われてなりません。今後は、感染症の存在に対して十分な知識を持つとともに、予防手段が必要になってきます。更に行政においては獣害対策に加え、地域に寄り添った、人獣共通感染症対策の啓発が必要になってきます。

サル類は、本来、寒さには弱いですが暑さは、さほど苦にしないようです。但し、例外ですが、ニホンザルのように下半島の寒さにも耐えられる強い種もいます。

野生のサルたちは、暑さ対策のため体毛が夏毛に変わり短くなっています。川の水に浸かったり、木陰でたたずむなど、暑さの対処方を心得ていて猛暑を乗り切っています。また、サルの夏場の活動時間帯は、比較的涼しい早朝と夕まぐれが多くなります。

名張A群は主に、比奈知湖、青蓮寺湖、上比奈知地区を交互に遊動を繰り返しています。名張A群では、ハナレザルが出没という報告もあり、注意が必要

種もいます。名張B群は、出没地は日替わりで、短い道程で遊動を繰り返しています。特に出没の多かったのは、白鳥神社周辺と古大野で、農作物被害があつたように聞いています。B群ではテレメトリや、目視でも所在の確認の取れない日がありますが、それは暑さを避け、無線の届かない奥山に入り込んでいたのかも……。

※出没状況図を参照してください。

困っているつもりでも効果のある困りになっていない事例が多く見受けられます。被害を減らしていくためには、農家だけでなく市街地住民と協力して取り組んでいくことが大切です。地方都市農村部と街部は、農村が風邪を引けば街では熱を出すというほどの共生関係にあり、都市部の菜園管

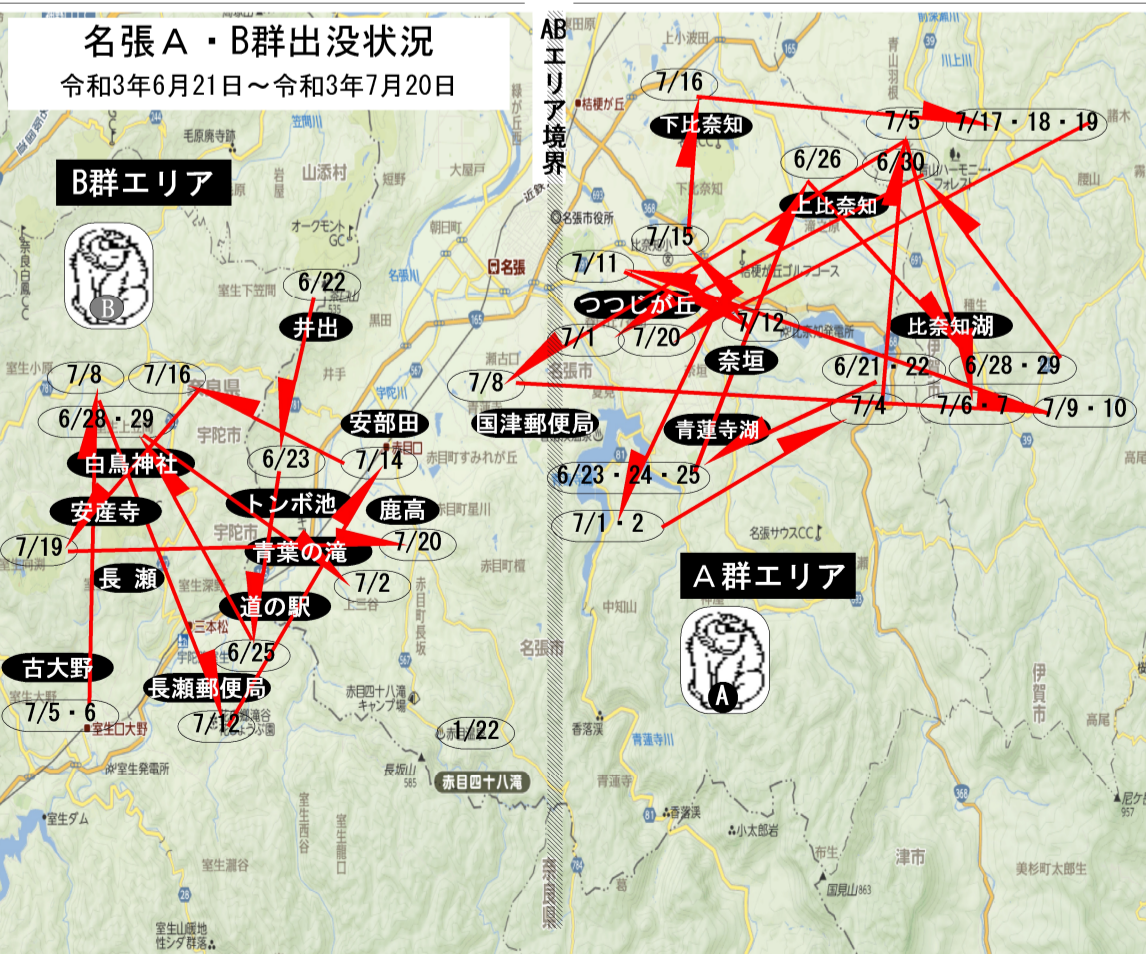
このため、地域全体として害獣が生息、侵入しにくい環境の整備や、捕獲などの対策を実施していくことが重要です。その結果、地域全体の被害軽減と個々の負担の低減を図ることが可能となります。ハクビシンなどの中型獣類は市街地にも多く生息している、市街地住民にも、これらの野生獣に対する正しい知識や対策の必要性について、理解を深めることが重要なこととなります。

ここ最近、獣害対策の現場では、「地域ぐるみ」で取り組むことの重要性が強調される機会が多くなり、地方都市全体で街の人や、農家・非農家が一体と

なる、地域ぐるみの対策の重要性が重視されるようになりました。今後は、対策を地域全体で進めるためには、街の人たちにも、野生鳥獣に対する正しい知識や対策の必要性について理解を深めることが重要になります。国勢調査（平成27年度）によると高齢化率が都市部が24%であるのに対して、農村部では31%。高齢化、過疎化の進行している集落においては、獣害対策の推進も困難な地域もみられ、それが獣害を増加させ、ますます過疎化に拍車をかける負の連鎖となっています。今後、対策をしなければ、更に被害は増加し、その結果として耕作放棄地は増え、野生動物の分布域はさらに都市部へ接近して行くことが予想されます。今や獣害は、全国的な問題で、市街地住民と農村部が意識の共有や合意形成を図り、地方都市全体の問題と捉え、対策に当たることを求められています。

中型獣類の被害は、農作物への被害だけでなく、生態系や生活環境にも及び、人獣共通感染症へのリスクは高まっています。今世界ではコロナ禍が広がっていますが、今後、新たな野生動物由来の病原体による感染症が発生するよう

※出没状況図を参照してください。



名張A・B群出沒状況
令和3年6月21日～令和3年7月20日